

俳句雑誌



2023.11

SORA 108号

空

令和5年11月20日発行

第21巻2号

通巻第108号

太宰府 山本則男

夕映えの色混じりたる吾亦紅
文字などのなかりし頃の胡桃割る
新しき風に乗り換へ鷹渡る
あくまでも正座くづさず生身魂
若き日も今もつまづく秋の暮

北九州 坂口学

鶏走る杣屋に千の吊し柿
滑車もて大の字に猪吊り上ぐる
獺終へし犬は荷台に眠りけり
猪鍋のはみ出す骨にためらひぬ
杣小屋の薪は野ざらし山眠る

福岡 あさなが捷

青蔦や片側赤き人体図
夏芝居をとこどこまでも非情
暑氣中りおのが悪事を数へをり
流星や我を通したるかぐや姫
祖より継ぐ田の方を見る生身魂

糸田 宮井知英

巢立鳥産毛に光つめ込んで
帰り行く子の背に付いてゐる螢
落し文つべこ言はず皆拾ふ
解けさうになき落し文握り締む
立秋の水に硬さの戻り来し

粕屋 吉田 葎

猛将にとり囲まるる山笠用意
血刀を波に洗へる飾り山笠
舁き山笠の傾く鶴の煙かな
白馬ごと武将倒るる山笠崩し
山笠崩し炎をかかへ去つてゆく

福岡 永淵恵子

黄落やどれも傷もつ石仏
陣立てのごとき豊後の藁ぼつち
ぬくめ酒素性を知らぬ者同士
玄海のよき風よき陽吊し柿
鳥けもの自在に放ち山眠る

北九州 河原敬子

パラグライダーの影の流るる芒原
置きざりにされてはならぬ芒原
目が合ひてゆるりと動く穴まどひ
白馬飼ふ山の分校秋高し
からからと音の出さうな黄葉晴

岡垣 田中とし江

棕鳥の群れに島畑昏みけり
潮焼けの竹の秀白し寒土用
軽トラは船と同じ名冬の風
夕暮の波音静か返り花
波の穂の光に紛れ冬鵜



広島 星加鷹彦

茶の花や大本営のありし城
強き子になれよと母の炒る蝗
単線を走る一輛稲架日和
蝗とぶ田んぼの中に予讀線
母看取る妻も老境蕎麦の花

福岡 三井所美智子

地獄絵を一瞥したる極暑かな
裸婦像に噴水の音ひびきけり
遠き日の銀座ふはふは苺ケーキ
夕涼や子に譲りたる曲げ輪つば
蓮の花抜きんづ父の干拓地

直方 吉田悦子

煤逃げの男ばかりのゴルフ場
北窓を開きて歌ふ恋の唄
婚札の仕度のやうに雛飾る
雛飾り仏間明るくなりにつけり
おだやかに老いゆく夫や夕桜

大野城 森川明成

秋日利仏具磨いて花替へて
里芋の畝たくましき畑かな
観るのみで元気になりぬ運動会
草の化簡素な零戦操縦席
深酒となつてしまひし夜長かな

直方 石橋幾代

山寺の僧侶ひとりの煤払ひ
片付けは妻にまかする松手入
日向ぼこだんだん眠くなる話
紅葉狩浮き世遠のくところまで
初鶏や土間に置かるる藁と鎌

直方 曾根富久恵

駅舎よ牛小屋が見え天高し
点検の梯子車秋の雲へ伸ぶ
秋風や川方に壁無き社かな
夕雲の崩るる新酒酌みにけり
庖丁に錆浮く釣瓶落しかな

福岡 秋津令

暗きより蛇の出で来る母の家
千代紙の金につつまし蛇の衣
母の手のとどかぬ桃となりにつけり
引く波に夕日の歪む残暑かな
職退きて歩くふるさと草の花

長崎 松尾龍之介

金管を見て田の色を想ひけり
彼の家の元氣印の柿すだれ
金木犀ところ番地を忘れけり
見逃してくれと動かず柿蠅螂
石積みは先人の智恵冬に入る



兵庫 林 徹也

棟梁のゆるがぬ木組み涼新た
母のもの羽織つてみたる土用干
芥子の花懺悔ためらふことひとつ
懺悔待つ列の尾につく秋暑かな
鍵盤の秋の蚊はらふ通夜のミサ

千葉 原 友子

秋麗や撫つれば落つる鍬の土
杖を手に池を巡りぬ返り花
夫呼べば返事しさうな案山子かな
秋草を活けて家来のごとく居る
冬隣ほどきて増やす糸の屑

北九州 兒 玉 充代

瀬音めく米研ぐ音や秋の朝
鰯雲確かな空となりにけり
やや寒し鏡に映る物の位置
菊の香やしもたやの戸の半開き
秋桜母になりきるおままごと

大阪 田 岡 千章

木犀の香りへ夜の歩数計
柿を剥くついと出でたる国言葉
泡立草岐路へ指押し信号機
手を繋ぎ歩けや歩けぬのこづち
生くることは世話かくること温め酒

兵庫 岡 村 尚子

いくたびも岩間をくぐる春の潮
しやぼん玉空を映して割れにけり
島へ行く真白き水脈や夏立ちぬ
生垣に雀の声や朝曇
自転車登校の列麦の秋

兵庫 えとう 樹里

秋夕焼魔術とけたること消ゆる
霜月の耳の内外きじみけり
みな仰ぎ誰もとどかぬ柘榴かな
片時雨鎌倉の寺つまらなし
大根の大いなる葉が畝おほふ

東京 山 田 正子

檸檬挽ぐ光を一つ消すやうに
鬼灯のもつとも朱き昭和の日々
一葉忌胸の埋火そのままに
むらさきに暮るる稜線木守柿
牛膝叱られし子に付いてをり

兵庫 大 西 乃子

ペリカンの喉のふくらむ秋の昼
短日の調剤室の灯りかな
ほぐるるに言葉はいらず温め酒
綿虫や石に還りし野の仏
日向ぼこ隣に母のゐることし

兵庫 岩井京子

神木の裏よりふはと秋の蝶
ゆつくりと団栗を踏む太極拳
誉められしレモンをあげるもう一つ
豊作の庭の柚子混む湯槽かな
年の暮顔映るほど刃物研ぐ

東京 今井康子

涼しさや一輪挿せる勝手口
人怖ぢぬ蜻蛉ばかりや山の上
鎌倉や日傘の幅の路地歩き
三伏や硬貨嵩なす池の底
繋ぎたる手の汗ばむを懼れけり

神奈川 窪みち子

釣果なき泡立草の眩しさよ
吾亦紅坂東武者の駆けし道
実むらさがさがさつに日々の過ぎゆけり
月光やチャイナドレスの若き母
間延びする鴉の声や小六月

兵庫 青木朋子

わが窓に隣家の楓広がりぬ
納豆へ庭に育てし葱加ふ
つんつんと真つ直ぐ空へ葱伸びて
綿虫や剥きだしとなる魂ありて
冬耕の畝に夕日の深き影

北海道 押田裕見子

小走りの若きメイドやクリスマス
師走とてさほど急がぬ暮しかな
夢をもつことを夢とし初御空
癌の虫吐き出すやうに咳込めり
雪雲や父母なき郷の空低し

長崎 仲里奈央

冬近し瞼を閉ぢしままの猫
小さき手のあなたが傍にクリスマス
凍空やけふは一人で眠れぬと
忘れもの多き人生日の短か
寒風や鼓膜をノックする朝

空集

柴田佐知子選



極めたる白磁の薄さ秋気澄む

福岡 高倉和子

表札の跡の白さや鯛雲

芒原吹かれて道の現るる

厨房のきしむ踏台秋土用

後悔に非ず無花果食べてをり

この先は乾ふ他なし唐辛子

鰻絵描く梯子の上を鳥渡る

直方 石橋幾代

大滝を去り尋常な世に戻る
海風の荒んできたる秋遍路

鈴一つ転がつてゐる祭あと

身の内の澱ごと夕立去りにけり

その果てに死神の待つ大花野

刈伏の藁踏む蟋蟀が跳ぬる

水底も空の明るさ秋の蟬

一本の電柱の影原爆忌

校庭の真中に踊りやぐらかな

水平線まぢかに秋の更衣

ころげ出て貌ほのぼのと栗の虫

逢ひに行く胸にふはふは赤い羽根

広島 戸栗末廣